

日本記者クラブ会報

公益社団法人 日本記者クラブ 〒100-0011 東京都千代田区内幸町2-2-1 日本プレスセンタービル TEL.03-3503-2722 <http://www.jnpc.or.jp/>



撮影：軸丸 雅訓 (西日本新聞社写真部)

流木の猛威

九州北部豪雨で、大量の流木が集落や田畑を襲った=7月6日午前6時12分、福岡県朝倉市杷木寒水

*7ページに「ワーキングプレス」

記者ゼミの新テーマは「調査報道」
実績ある講師陣がノウハウ伝授

現役記者を対象に取材力アップをめざす「記者ゼミ」は今年度、IT講座に加え、調査報道がテーマに加わった。題して「誰でも調査報道」。経験豊かなプロが講師となり、ネット取材からジカ当たりまで調査報道のノウハウを伝授している。

何回かゼミをのぞいてみた。「情報公開制度で単に『会議』と申請すると公的な会議だけに限定される。『協議、連絡、打ち合わせ』と網を広げて請求すること」「取材対象を担当していた元職にあたるのは極めて有効。ヒマだし、舞台裏を喜んで教えてくれる」など具体的なアドバイスが飛ぶ。

質疑では「不意打ちしたい相手が住むマンションはオートロック。住民の出入り時に一緒に入ったら違法なのか」とコンプライアンス重視時代らしい質問が出た。「立ち入り禁止」は「おいしいネタあり」の意味。立ち入るべし」と教えられた時代は遠い昔だ。「住居侵入罪の要件は『正当な理由がない場合』。一概に違法とは言えない。判断はケースバイケース」が回答だった。百戦錬磨の講師からは「権力相手の調査報道は『返り血』を浴びる。記者生命をかけてやれ」とのシビレル激励も。

毎回、約30人の各社記者が参加している。ここで学んだ手法を生かして大スクープを期待したい。これからの参加も大歓迎。希望者は事務局 (seminar@jnpc.or.jp) へ。

(専務理事 土生修一)

会見レポート	3・5
イルデフォンソ・グアハルド・ビジャレアル・メキシコ経済相／太田秀樹・医師／松田晋哉・産業医科大医学部教授／鈴木美勝・ジャーナリスト	
上映会	5
日本と再生 光と風のギガワット作戦 朝日新聞社 伊藤正樹	
第5期記者ゼミ	6
ワーキングプレス	7・9
九州北部豪雨 5年前と同じ現場で考えた あの報道は役に立ったのか 西日本新聞社 古川 努	
中東記者 紛争地取材 頼みの綱は「案内人」 読売新聞社 本間圭一 国連本部 北朝鮮ウオッチの現場は「サツ回り」のように泥くさく 共同通信社 高木良平	
新・列島報告 仙台市長選	10
国政直撃で明暗 波紋広げる代理戦争 河北新報社 若林雅人	
被災地通信 北海道十勝地方 11連続台風から1年 地方紙の役割を再認識 十勝毎日新聞社 小林祐己	
書いた話書かなかった話	12・13
永田町取材あの時この時 「口止め」の重さ、「内緒話」の難しさ 国分俊英	
リレーエッセー	14
多様性と平和主義を学ばれた 英国留学時代の浩宮さま 八牧浩行	
マイBOOKマイPR	15
寄贈書	16

トランプ政権とメディアとの対立を現地 米本土へ初の海外取材団、参加募集中

米国のトランプ大統領によるメディア攻撃は就任後もやまずエスカレートするばかり。日本記者クラブでは、「ホワイトハウス対メディア」の対立の実態を現場で知るために、9月24日から10月1日まで、米国ワシントンに取材団を派遣する。

当クラブでは、これまで欧州、東南アジア、中国、韓国、ハワイなどへ海外取材団を派遣してきたが、米本土への派遣は初めてとなる。

訪問先を含めスケジュールを現在詰めているが、米国の代表紙である「ワシントン・ポスト」のキャメロン・バー編集局長とのインタビュウは確定した。同紙は、大統領選期間中にトランプ氏の過去を20人以上

の記者が徹底取材した「Trump Revealed」邦題「トランプ」を出版したほか、政権発足後も、「Democracy Dies in Darkness（暗闇の中では民主主義は死んでしまう）」との新スローガンを掲げ、ロシア疑惑追及も含めトランプ政権の問題点を積極的に報道している。同紙の現場記者にも話を聞くほか、今年完成したばかりのニューズルームも見学する。

このほかにも、保守系ニュースサイト運営者、AP通信ワシントン支局長、世論調査会社担当者、メディア研究者とのインタビュウやジャーナリズム専門博物館「ニューズジャーニ」の訪問なども予定している。

取材団の団長は、杉田弘毅・共同

通信論説委員長、通訳兼案内役として、元共同通信でNY在住ジャーナリスト、津山恵子さんが同行する。

参加の締め切りは8月21日。問い合わせは、当クラブ事務局(03・3503・3766)まで。

◆中国取材団、日程終え帰国

7月24日から1週間にわたり、中国を訪れていた日本記者クラブの取材団(団長 坂東賢治・毎日新聞専門編集委員)は全日程を終えて、31日に帰国した。中国への取材団派遣は3年連続で3回目となる。

今回のテーマは、中国の習近平政権が力を入れる「一帯一路」構想。取材団は、北京でA I I B(アジアインフラ投資銀行)幹部に会った後、陸路の起点となる陝西省の西安市に



北京の金融街にあるアジアインフラ投資銀行(AIIB)本部を訪問。取材に応じた報道官はカナダ人女性だった(7.24)

飛び、中国—欧州を結ぶ国際貨物鉄道などを取材、続いて海路の起点となる福建省に移動して、自由貿易区や海上シルクロード建設現場などを訪れた。詳しい取材内容は9月号に掲載する。

◆記者研修会、日程終了

今年度の記者研修会は、全国のメディア各社から若手、中堅記者約60人が参加して、8月7日、8日の両日、当クラブで行われた。今回は、地方メディアの防災への取り組みを意見交換するパネルディスカッション「防災・啓発とメディア」や中国大使館訪問などが行われた。

また研修終了後に引き続き、東電柏崎刈羽原発視察などを内容とする新潟取材団が派遣された。いずれも内容は9月号で詳報する。

◆

■1995年度クラブ賞受賞の山本祐司さんが死去

司法の内幕に迫った『最高裁物語』で95年度日本記者クラブ賞を受賞した山本祐司さんが7月22日、脳出血のため死去した。81歳。毎日新聞社会部でロッキード事件など多くの疑惑・裁判報道に携わった。社会部長在職中に脳出血で倒れ右半身不随となるが復帰。退職後も執筆活動を続けた。他の著書に『東京地検特捜部』『毎日新聞社会部』などがある。

左記のゲストの会見リポートは3〜5ページに掲載しています

太田 秀樹 医師

■7・5(水)シリーズ企画「2025年シヨックどうする医療・介護」③／司会：梶本章前委員／出席：48人

イルデフォンソ・グアハルド・ビジャレアル メキシコ経済相

■7・20(木)記者会見／司会：播摩卓士委員／通訳：大野理恵／出席：32人

鈴木 美勝 ジャーナリスト

■7・20(木)著者と語る「日本の戦略外交」／司会：杉田弘毅委員／出席：50人

松田 晋哉 産業医科大学医学部教授

■7・21(金)シリーズ企画「2025年シヨックどうする医療・介護」④／司会：梶本章前委員／出席：40人

会見余話

●訪問治療の先駆者、太田医師

笑いと怒りの最前線報告
訪問治療の先駆者である医療法人アスムス理事長の太田秀樹医師の会見は、訪問介護の最前線での体験談満載だった。テーマは深刻だが、ユーモアの味付けが絶妙だった。

「寝たきりのおじいさんが口をゆがめ

て『タマ、タマ』と呼ぶので、てつきり愛猫だと思つて近くを探したが、おばあさんの名前がタマだった」。会場爆笑。

末期患者の悲しい現実も数えきれないほど見てきた。「チューブで栄養を入れられて、痛い、痛いと言いながら死ぬ。これでいいんですか」。会場は静まり返った。

会場からの質問も、親の介護への助言など身近なものが多かった。「よい訪問看護師の見分け方は？」の問いに太田さんの回答は、「訪問看護師はヘルパーと一緒に仕事することが多い。ヘルパーに恐れられている訪問看護師はダメです」。参考になれば幸いです。

●高齢化無策に強い警告

同じ「25年シヨック」シリーズの松田晋哉教授は高齢化に対する無策ぶりに辛辣だった。

「団塊ジュニアが40歳を超えた。この世代への少子化対策失敗で何をやっても人口は減っていく」日本人は100円出して200円のサービスを受けている。このままでは崩壊確実」都会の秀才が地方大学の医学部に進み都会に戻る。育った土地で仕事ができる環境づくりをやっていない」

「与謝野馨さんは少子化対策を真剣に考えていた。あの人が首相になっていれば……」。控室でのつぶやきだ。

(土生修一)

イルデフォンソ・グアハルド・ビジャレアル

日本と関係強化の余地大

メキシコ経済相

貿易立国の日本にとって、自由貿易は国益のかかる重要な原則だ。だが、保護主義的な政策を進めるトランプ米大統領が就任して、この原則が揺さぶられている。そんな折、来



日したメキシコの通商責任者グアハルド経済相は「国境を開いたまま、いかにして自由な貿易を維持するかを考える」と表明。日本とメ

キシコは自由貿易で利害が一致しており、両国の協力関係を強化する余地は大きいと思わせる会見だった。

米国が離脱した環太平洋連携協定(TPP)。一部の国からは米国抜き(TPP)には経済的なうまみは少ないと消極的な意見もある。だが、「アジアとの自由貿易圏をつくる際の橋渡し」と意義を強調。日本と同じく、米抜きTPPを推進する立場を鮮明

にした。

メキシコが米国、カナダと結ぶ北米自由貿易協定(NAFTA)再交渉にも質問が集中した。米国は、貿易相手国の通貨安誘導を阻止する「為替条項」の導入や貿易赤字の削減を目標に掲げるが、「わが国は変動相場制。(為替を)操作できない」とけん制。一方、「貿易を制限する方向ではなく拡大する方向であれば、貿易再均衡の協議があると(米国に)伝えてある」と柔軟な姿勢も見せた。

工場を持つなどメキシコに進出した日系企業は1000社を超える。NAFTA再交渉の結果、メリットなしと判断すれば、撤退することになりかねない。来日中は経団連で経済セミナーを行い、産業界と積極的に意見を交換。「生産性の高い話し合いができた」と、口ぶりからは一定の手応えはあったようだ。

会見の最後には、日本代表FW本田圭佑選手がメキシコのサッカー1部リーグ、「パチュイカ」に移籍したことにも質問が及んだ。「ライバルチームを応援することはできない」私の応援するチームに引張る可能性があるかもしれない」と冗談交じりに語り、気さくな人柄をのぞかせた。

時事通信社外国経済部 田中 健吾

太田 秀樹 医師 病院完結から地域完結へ

医療・介護関係の取材をしていると近年、避けては通れない「地域包括ケアシステム」。そんな言葉や概念が生まれるはるか前の1992年から、多職種で連携し、24時間・365日対応、自宅で最期まで見届ける在宅医療に取り組んできた太田秀樹氏から、その重要性と実践を聞いた。



日本人の寿命が延び、大部分の高齢者は治療より介護が必要な脆弱な期間を経験して亡くなる。

しかし、日本人はまだまだ医療が高度化した時代の「病院信仰」から抜けきれず、死なせないのが医療というイメージが強い。病院死の割合も、先進諸国と比べ日本は圧倒的に高い。太田氏は、超高齢、多死社会の医療の役割は、苦痛を取り除き、その人の尊厳を守り、生活を支えることだと指摘し、病院完結型から地域完結型の医療に変わらなければなら

ないと訴えた。

長年の実践から、生活の場で提供する在宅医療の主役は訪問看護師であり、最期まで口から食べられるよう支援する訪問歯科の協力が欠かせないと強調した。また、医療機器の小型化や高性能化、貼るだけの医療麻薬といった新薬の開発などによって、在宅医療の質は病院医療と遜色がないほど向上していると説明した。

太田氏の経営する医療法人では、栃木県小山市など3市で計3カ所の機能強化型在宅療養支援診療所を運営。それぞれショートステイや老人保健施設を併設しているため、在宅での療養が厳しい時には施設ケアが受けられ、「即入院」を避けられるという。

食の重要性を繰り返していたのが印象的だった。最期まで好きな物を食べられることが人間の尊厳につながるのだと。高齢者への多剤投与が問題となっており「薬でお腹がいっぱいになる」という冗談もつかない話をよく聞く。人として当たり前な行為、喜びを大切にすることが暮らしを支える医療の本質にあると思いを知らされた。

毎日新聞社医療福祉部副部長

山崎 友記子

松田 晋哉 産業医科大学医学部教授 超高齢社会で果たす役割

ニーズに沿って地域医療の形を作り直していく。医療提供体制の在り方を研究する産業医科大学の松田晋哉教授が、超高齢社会に適した役割を医療機関が果たす重要性を訴えた。これまで医療機関は手術や救急な



どこに対応するベッド(病床)を多くそろえ、治療にあたってきた。現役世代を治療対象の中心に据え、「治す医療」に軸足を置いてきた。

団塊の世代が全員75歳以上になる2025年には、地方を中心に人口減に伴って患者は減り、高齢者の割合が高まる。リハビリや在宅医療・介護との連携など、「治し支える医療」への転換が求められている。

政府の有識者調査会は2年前、25年に全国で必要な病床数は、現状の135万床より少ない115万〜1

19万床という推計を出した。治し支える医療を重視した結果だった。治す医療の継続を望む病院は多いが、「患者のニーズに合わなければ、つぶれる。住民が困る」と、推計の中心メンバーの松田氏は強調した。

推計結果は在宅医療が進むと仮定し算出された。高齢者が安心して自宅や介護施設で過ごすには、肺炎や心不全が重症化した際に対応できる病院が欠かせない。医師が1人だけの診療所が多い中、地域の患者を24時間体制で支えるには医療機関同士が協力する仕組みも必要になる。

健康のための町づくりの視点も大切だ。一人暮らしの高齢者は家にこもりがちだ。松田氏は、住民が気軽に訪れる高齢者施設のレストラン、高齢者が子どもの宿題を手伝うカフェなど、会話が自然と生まれる行政や医療関係者らの工夫を紹介した。

交流で町は活気づく。高齢者が安心して暮らせる町づくりは魅力ある地域づくりと直結すると教わった。ただ、将来像を描く仕事を人任せにしては明るい未来はひらけない。松田氏は「自分事として考えるべき」と繰り返し述べた。それが住民の役割だと肝に銘じたい。

読売新聞東京本社医療部 米山 肅彦

鈴木 美勝 ジャーナリスト

安倍外交 「権謀術数」への変質に苦言

昨年夏に安倍外交は「変質した」。記者として解説委員として、そして雑誌「外交」の編集長として日本外交の在り方を最前線で追い続けた末の話だから、前かがみになって話を聞いてしまった。



変質とは、「地政学的視線に加えて世界的潮流を読み切って現実に対応する」戦略的リアリズムから、「狭い政

治空間・短射程の時間軸で優位な政局的ポジションを獲得しようとする場当たりの「権謀術数的リアリズムへ」というから厳しい評価である。それでは昨夏に何が起きたのか。鈴木氏は7月の参院選で改憲勢力が3分の2を超したことが大きいという。総裁任期延長のシナリオが動き始め、一方で首相自身に勢いがなくなり、それだけレトリックに頼るようになった。その変化を「満月は必

ず欠けるものだ」と形容した。

安倍外交の絶頂期は2015年春の訪米と見る。米議会での英語のスピーチや、オバマ大統領を爆笑させた公式夕食会でのユーモアあふれるスピーチ。それは長く日米首脳会談を見てきた私も、日本の首相がここまでワシントンに歓迎されるまでになつたのかと感慨を覚えたものだ。

権謀術数外交の象徴は、プーチン・ロシア大統領を相手にした昨年後半の日露外交である。領土の問題は進んでいないのに、経済協力を前のめりにやるという新アプローチが、高揚感を持って語られた。実態は厳しい助言を受け入れない陣立てに変わってしまった。焦点の日中関係にしても、中国側の対日関心が無いのに日本側のレトリックが先行し「迫力は感じられない」と。

結びで挙げたのは、大平正芳の「権力の本体は術策にあるのではなく、権力者自らの在り方にある」。揮ごうは「潔く」。それは自戒というが、もっと幅広い意味を込めたに違いない。この揮ごうといい、大平の言葉といい、鈴木氏は保守の人と見た。だからこそ、今の「権謀術数」安倍外交に業を煮やしている。

企画委員 共同通信社論説委員長

杉田 弘毅

日本と再生 光と風のギガワット作戦



世界が先行、風力・太陽光… 脱原発弁護士「実証」ルポ

響とともに「原発がダメなのはわかっただけ、電気はどうしたらいいの？」という質問が多く出た。それで「自然エネルギーと省エネしかない」を実証しようと考えた。

環境学者である飯田哲也・環境エネルギー政策研究所長が企画・監修。全編100分。ひたすら河合監督と飯田氏が現場を歩き、人に会う。フリップを使つての解説・報告はわかりやすく軽妙で笑えるところも多い。

ドイツつてズルイ？ フランスの原発が作った電力に頼っているから。検証すべく現地へ飛ぶ。

北ドイツの「風車の森」。約150基の風力発電が林立、なお増設中だ。政府や経済界幹部に面会。日本からの客人定番の質問だ、と苦笑交じりの答えは：ドイツは周辺諸国への電力輸出国として急伸している、

対仏も輸出超過だとの数字。自然エネルギーは、設備の新設・更新、制御システムなど投資が安定して持続し、技術革新や成長につながり、経済合理性があるとの見解が示される。

河合弘之監督(72)は、全国で脱原発訴訟を闘っている弁護士だ。私財を投じて映画『日本と原発』2作を制作、本作は3作目。前2作は自主上映運動により10万人が観た。反

©Kプロジェクト

伊藤 正樹

第4回：汚いデータを洗浄する

6・29(木)講師：松波功・中日新聞社
電子編集部／出席：31人

◎ソフトを使いこなすという意味

膨大なデータから欲しい情報を抽出するには、基となるデータがきれい、汚いかで大きく労力が変わる。きれいなデータとはエクセルなどの表計算ソフトで開いた時に、手掛かりが整っているデータのことだ。普段目にするデータの多くは、手掛かりが整っていないし、公文書や領収書などは、そもそもデータ化すらされていない。

今回の講座ではオープンデータである公示地価を使った例題。2万5千拠点以上の住居表示から都道府県別や地方別に抽出して、並び替える技を表計算ソフトを使って実践。都道府県名を抽出するだけでも、3文字名と4文字名があるから一筋縄ではいかない。一見きれいなデータであっても、情報の処理には都合の良いデータとは限らないというわけだ。

社内に目を向けると、道具の存在や使い方を知ること、解決する業務も多いと思う。道具を自分の武器とするには実践するしかないと再認識した。

朝日新聞報道局兼デジタル編集部兼情報技術本部
今垣 真人

第5回：「宿題」発表会

7・13(木)講師：松波功・中日新聞社
電子編集部／出席：18人

◎手を動かして、やってみる

「今回は公示地価データを基に自分の仮説を立て、データを検証し発表してください」。第4回講座の終わり際、講師から出された課題は参加者をドキリとさせた。猶予は2週間、どんなことができるだろうか。

第5回は「宿題」発表会。これまでのゼミで学んだエクセルの機能や地理情報システム(QGIS)を駆使し、視覚的な表現を用いて結論を伝える。発表はプレゼンテーション用ソフトを使って行われた。

講師の呼び掛けに応じた参加者は11人。「大阪の南北格差と地価変動の関係」「つくばエクस्प्रेसの登場地価に与えた影響」「放射線量は地価形成に関係しているのか」など、独自の視点からデータを深掘りし、研究成果を披露した。

発表資料の作成は悪戦苦闘の連続だ。座学の講座で使えるつもりになっていたITツールも、実践に臨むと分からないことばかり。苦労の量が習熟度につながっていくことを願う。

時事通信社編集部デジタル編成部
川上 貴之

IT講座

第5回：ハウツー基礎講座③(発表)

7・6(木)講師：奥山俊宏・朝日新聞社
編集委員／出席：32人

◎「情報」と「証拠」を見極める力

証拠になる情報と証拠にならない情報がある。これは記者にとつての原理原則だが、調査報道ではより細心の注意を払う必要がある。そのためにはどのような証拠を集め、記事を組み立てるか。

ハウツー基礎講座3回目の講義はこれまでと同様、朝日新聞の奥山さんの豊富な経験に基づく実践的なノウハウで満ちていた。「インタビュー相手を実際に経験したこと、解釈や伝聞を交えて話すことを分けなければならぬ」と説く。相手を信じてしまふ落とし穴を避ける心構えが要るのだ。法廷で立証できなくても「事実」であれば記事にすべきことがある。だからこそ証拠が必要だとの奥山さんの主張は重い。

講義の後半は原点に回帰した。調査報道の「端緒」をどう開くか。「とにかく現場を歩く」から「民事訴訟記録を見る」まで。誰でも明日から、ちよつとした工夫と地道な努力でネタを掘り起こせる。背中をぐっと押されたような気がした。

日本経済新聞社総合編集グループ
鷲森 弘

誰でも調査報道

第6回：情報公開と公開情報②
公文書で読み解く

7・20(木)講師：森本尚樹・神戸新聞社
編集部報道部／出席：22人

◎地道な積み重ねから特ダネ

雑談から端緒をつかみ、公文書を丹念に調べる。神戸新聞の森本尚樹記者の話は、これまでの講座で説かれていた調査報道の実践例ともいえ、地道な取材の積み重ねから特ダネまでに至る過程を追体験できた。

森本記者は、ある自治会長をめぐるうわさから神戸市の不明朗補助金の端緒をつかみ、情報公開請求で関連資料を手に入れた。膨大な公開請求資料を扱うコツとして、「支出額が小さい電話代や交通費より、委託費や印刷費を先に調べる」「見出しになるのを意識して数字を集計する」といった手法を披露してくれた。

神戸新聞の特報を後追いする全国紙がなかった点は気になった。森本記者は「地域の自治会の話」と捉えられたのだろうと分析。参加者からは「より普遍的な問題につなげられるのでは」との意見も出た。一見、局所的な話題をいかに普遍的なニュースとして見せられるか、という示唆に富む話だった。

東京新聞経済部 伊藤 弘喜

九州北部豪雨

古川 努(西日本新聞社社会部)

5年前と同じ現場で考えた あの報道は役に立ったのか

山を見上げれば、赤茶けた土砂崩れの痕跡が生々しい。目の前には集落全体が濁流に流された現場があり、不自由な避難生活を余儀なくされた住民の姿がある。この原稿は、

災害発生から3週間が経過した福岡県朝倉市で執筆している。急いで書き終え、再び現場へ向かうつもりだ。

7月5日、福岡、大分両県の筑後川中流域を襲った九州豪雨。両県の犠牲者は計35人。なお6人の行方が分からない(7月27日現在)。連日35度を超える猛暑の中、捜索と復旧作業が続き、600人を超える人々が避難生活を強いられている。

西日本新聞は災害発生以来、最前線に記者を大量投入してきた。私も5日以降、ほぼ連日、被災地で取材を続けている。通常、災害の発生当初は、断片的な不確定情報を基に現場を探さざるを得ない。事態が刻一刻と変化していく豪雨災害では現場にさえたどりに着けないこともあり、取材は手探りとなるのが常だ。だが、

今回、ある程度は被害地域の予想がついた。

**同じ川、同じ集落、同じ顔…
足が震えた**

その理由は5年前の2012年7月にさかのぼる。当時、私は朝倉支局に勤務し、支局管内の朝倉市や隣接する福岡県東峰村で「九州北部豪雨」の取材に従事していた。山が崩れ、河川が氾濫した。自治体はその後、災害を検証し、防災対策を強化した。その過程を見てきた。

それなのに、悲劇はさらに規模を増して再来した。5年前に河川の氾濫が多発した朝倉市東部の杷木地区は、また被害を受けた。規模は今回の方が比べものにならないほど大きく、氾濫したのは同じ川。被災したのは同じ集落。現場に立ち、足が震えた。

あの時の、あの報道は役に立ったのだろうか。あちこちの現場に5年ぶりに見る顔があった。家ごと流さ

れ、再会を果たせない人もいる。この5年間で、もつとできたことがあったのではないか。

前回は崩れなかった山も崩れた。流木による被害という新たな問題も見えてきた。「5年前の大災害」の経験が、想定範囲を狭くしてしまっていたのではないか。答えはまだない。できるのは、目の前の現場取材だけだ。

濁流にのまれて行方不明になった人の家族が見守る捜索現場に足を運ぶ。大量の流木や、集落を埋め尽くした大量の土砂は、どこから、どうやって運ばれたのか。砂で埋まった河川の上を歩き、思いをめぐらせる。

どうすれば、災害ボランティアをもっと呼び込めるのか。打撃を受けた基幹産業の農業を、どう立て直していけばいいのか。国や県、自治体が復旧、復興計画をどう立てていくのか。長期化する避難所生活の中で、暮らしの再建に踏み出そうとする住民と共に考えたい。

**「この惨状を伝えて」
被災住民の言葉を力に**

今、私は、5年前に朝倉市杷木林田の男性に掛けられた言葉を思い出している。休暇を取り、災害復旧のボランティアを志願したときのこと



土砂や流木が散乱する川を歩いて渡り、安否不明者の捜索へ向かう自衛隊員(7月10日午前9時9分/福岡県朝倉市杷木志波/佐藤桂一撮影)

だった。「あんたはせんでよか(しなくていい)。それより、この惨状を偉い人たちに伝えてくれんね」

地方の単独支局勤務を経験した記者ならばお分かりだと思うが、記者と住民の距離は極めて近い。住民の言葉は、記者を突き動かす。他人ごとではなく、わがごとと捉え、報じていきたい。

昨年4月の熊本地震もそうだった。風水害や地震、火山災害を幾度も経験してきた九州の新聞記者の使命として。

ふるかわ・つとむ▼2007年入社
会部遊軍 朝倉支局には11年から4年間勤務

中東記者

本間 圭一（読売新聞社カイロ支局）

紛争地取材 頼みの綱は「案内人」

イスラム過激派組織「イスラム国」が3年前、「建国」を宣言したイラク北部モスル。6月から7月にかけて、大詰めとなったイラク軍による奪還作戦を取材するため、北部の都市アルビルに出張した。

クルド自治区のアルビルは比較的治安が安定し、モスルまで西に約80キロ、車で2時間と近い位置にある。モスルの陥落は、「イスラム国」の終わりの始まりを告げる大きなニュースになるため、世界中のメディアがアルビルに押し寄せ、戦況を見つめ、モスル入りの機会をうかがっていた。

ところが、外国人記者の多くは、アラビア語もクルド語もできず、治安情勢に疎く、イラクの軍や警察につてがたい。モスルのような「無法地帯」では、命取りになりかねない。そこで登場するのが、通訳や取材同行などのサービスを提供する「フリージャーナリストや学生が多く、ニュースが立て込む際の臨時ア

ルバイトとして、アルビルでは数十人が活動しているといわれた。

記者たちは、他社との情報交換を通じて、信用の高い案内人を探し出す。案内人も、記者が滞在するホテルに出没し、記者たちに接近してくる。通常は通訳と取材同行の提案が多いが、治安面も含めた「フルサービス」を持ちかける人もいる。モスル入りの場合、通訳、取材同行、防弾車や治安要員の手配、軍や警察との調整の手数料などで、その提示額は記者1人当たり2000ドル（約22万円）を超え、とてもめめない金額となる。

「イスラム国」幹部は友人の友人の友人？

怪しい人には特に気を遣う。「イスラム国」の幹部に会いたいかい？」と、きなくさい話を持ちかける案内人がいた。そもそも、「イスラム国」には直接取材のルートがないため、幹部に会えれば、「イスラム国」の内部事情に迫ることができ

る。通訳や謝礼で、その価格は1000ドル（約11万円）。よくよく聞くと、友人の友人の友人が取材相手だと言ひ、疑わしくなった。

イラクのメディアによると、ある案内人は昨年末、「イスラム国」のメンバーに会わせる」と言ひ、外国人記者を連れ出し、「イスラム国」とは無関係の男にインタビューさせ、2000ドルをだまし取ったという。

アルビルでの滞在が長引くにつれ、案内人にもピンからキリまであることが分かってきた。米国人記者ステイブン・ソトロフ氏が3年前にシリアで「イスラム国」に拘束され、斬首されたのは、案内人が移動情報を売ったとの疑惑があったこと



モスル市内で戦闘地から避難する住民（7月10日／筆者撮影）。案内人が取材を支えることも少なくない

も頭をよぎった。

一方で、案内人にもリスクは伴う。取材に同行し、何度も紛争地入りしているうちに、敵性メディアの協力者とのレッテルを貼られるためだ。ある案内人は自ら「経験が長い」と豪語したが、「イスラム国」の支配地の近くには絶対に行かない」と断ってきた。イラクのメディアによると、アリ氏（仮名）は、案内人として、大手メディアに報道されるうちに「有名人になってしまった」。ある日、治安関係者から「イスラム国」がお前を狙っている。すぐにアルビルを去れ」と言われ、家族と共にイラク北部に逃げた。

外国メディアの取材は、案内人に左右されることが多いのが現状だ。ここでは信頼関係を築けるかが最大の課題となる。「俺を信用しろ」と真顔で迫られ、「俺はCNNやBBCと仕事をしている」と信用力を誇示されても、周囲に評判を尋ね、取材の準備状況を精査し、妥当な価格かどうかを見極める。相性にもよるので、一緒にいる時間を長くする。段取りに気を遣うのが紛争地での仕事になっている。

ほんま、けいいち▼1992年入社
オデジャネイロ支局などを経て 2016年3月からカイロ支局長

国連本部

高木 良平(共同通信社ニューヨーク支局)

北朝鮮ウオッチの現場は 「サツ回り」のように泥くさく

日本が非常任理事国として国連安全保障理事会入りするのと同じようど同じタイミングの2016年1月1日、私は国連担当になった。それから1週間もしないうちに北朝鮮は4回目の核実験を実施。間を置かずには弾道ミサイルを発射し続け、5回目の核実験も強行するなど、その後の波乱の展開はご存じの通りだ。

国連取材は国内で例えると事件処理をする司法担当に似ていて、世界の平和を脅かす重大事案に対する国際社会の対応を追うのが主な仕事だ。着任当時は、まさかこれほどまで北朝鮮情勢を追い続ける日々になるとは想像もしていなかった。北朝鮮ウオッチの現場の1つにもなっている、国連取材の舞台裏をお伝えしたい。

厳しいかん口令

国連の事実上の最高意思決定機関である安保理の取材で最も骨が折れるのが、北朝鮮の核実験や弾道ミサ

イル発射を受けた制裁決議案交渉の取材だ。安保理の外交官は、制裁案件になると途端に口が固くなる。事前に情報が漏れれば北朝鮮の制裁逃れに利用される恐れがあるというのが建前だが、実際は米国が厳しくかん口令を敷いている影響が大きい。

北朝鮮の制裁決議案交渉の流れはほぼ決まっている。米国がたたき台となる制裁案を作成し、北朝鮮の経済的な後ろ盾となっている中国との協議に入る。米中が合意した段階で、残りの常任理事国の英仏口にも決議案が回され、ここで異論がなければほぼ確定する。

交渉中は明けても暮れても米国や中国の関係者らを追いつけ回すことになる。特にニューヨークの冬は寒く、朝回りはコートを2枚重ねねしても体にこたえる。みんな「話せない」の一点張りだが、表情の変化を見れば進捗状況も感じ取れるようになる(気がする)。国連という「一見華やか」な印象もあるかもしれない

が、日々の取材はサツ回りと同じでも泥くさい。

外交官の意外な一面も

米国と国交を持たない北朝鮮が、国連活動の足場としているのが国連代表部だ。マンハッタンの国連本部から徒歩5分弱のビルの13階に位置する。外交筋によると、計約10人の外交官のうち1人が通称「ニューヨーク・チャンネル」と呼ばれ、米国との対話の窓口を務める。彼は北朝鮮の理解者との接触を続けているが、核・ミサイル開発の継続により政府間の対話は中断したままだという。

北朝鮮は日本人拉致問題や核実験で負のイメージが付きまとうが、個々の外交官とやりとりすると、意外なことに総じて朴訥で礼儀正しい印象を受けることも多い。国連加盟国の中には北朝鮮の友好国もあり、こうした国とは密にやりとりしているようだ。先日会った北朝鮮の外交官は「キューバに出張していた。北朝鮮では考えられない暑さで、すっかり参った」と話していた。

安保理が制裁を軸に対北朝鮮包囲網を強化する中、北朝鮮は水面下で対抗する動きを加速させている。国連事務局にも外交官を派遣する計画を進め、組織内部から揺さぶりを掛



北朝鮮に対する新たな制裁決議案を採択した国連安全保障理事会(米ニューヨーク/2017年6月2日/共同通信社提供)

けようとしているのだ。制裁関連情報の流出を懸念するヘイリー米国連大使はグテレス国連事務総長に電話し、北朝鮮の外交官を採用しないよう強くくぎを刺した。米政府は北朝鮮の国連大使のビザ更新を一時的に拒否する異例の嫌がらせをするなど対立は先鋭化している。

北朝鮮が核・ミサイル開発に関する交渉のテーブルに着く兆しは見えない。北朝鮮にとって核開発は核保有国としての地歩を築くステップの1つで、欧米の外交官が言うような「挑発行為」では、もはやないのかもしれない。

たかぎ・りょうへい▼2003年入社
イスラマバード・カブール支局などを
経て15年11月から現職

新・列島報告⑫ 仙台市長選

国政直撃で明暗 波紋広げる代理戦争

若林 雅人
(河北新報社)

新人4人が争った7月23日投開票の仙台市長選で、民進、共産、社民、自由各党が支持・支援した元民進衆院議員の郡和子氏(60)が自民、公明、日本のこころ各党が支持した会社社長菅原裕典氏(57)をかわし、初当選した。告示直前の東京都議選で自民が大敗し、学校法人「加計学園」問題などで安倍政権の支持率が急落する中での選挙戦は、国政与野党の激しい代理戦争の場となった。

市長選は当初、共産を除くオール与党の市議会をバックに現職奥山恵美子市長(66)の3選出馬が現実視され、無風の観測だった。が、奥山氏は4月、今限りでの引退を表明。各党

は慌ただしく候補者選びに突入した。

■野党共闘「宮城方式」で 自民と激突

最初に動いたのは宮城県政界に君臨する村井嘉浩知事だ。奥山氏の引退表明直後の記者会見で「1つの選択肢として経済人」と意中候補の存在を示唆。ほぼ同時に村井氏の盟友で冠婚葬祭会社社長の菅原氏が出馬に意欲を示し、自民も菅原氏を担ぐ方針を確認。村井―自民ラインが、まずは流れを作った。

これに対し、民進は腰が定まらなかった。市議会の民進系党派の一部は市政野党への転落を恐れ、相乗りを模索。党派連も4月末によく



選挙事務所内で当選を喜ぶ郡氏(中央)(7月23日/河北新報社提供)

候補者選考委員会を設けたが、市議会の意向にも配慮し、独自候補擁立は選択肢の1つにすぎなかった。

5月中旬になり突如、主戦論に転じる。「勝てる候補」として衆院議員4期目で知名度の高い郡氏を軸に検討を進め、市議会も説き伏せて6月上旬、擁立にこぎ着けた。郡氏なら他党や市民団体との連携が取れることが理由だったが、民進関係者は「安住淳党代表代行の意向が大きかった」と指摘する。

県連代表でもある安住氏は昨夏の参院選宮城選挙区で、安全保障関連法廃止を旗印に全国に先駆けて民進候補への共産、社民両党の推薦を取り付け、自民候補との現職対決を勝利に導いた。「宮城方式」と自負する野党共闘の枠組みを仙台市長選でも維持し、次期衆院選につなげる戦略を安住氏が描いた―というのが関係者の見立てだ。与野党激突の構図が固まった。

■盤石揺らぐ 秋の知事選にも影響か

選挙戦では村井氏が告示日から菅原氏に付き添い、告示直前に後継者として菅原氏支持を表明した奥山氏もマイクを握った。負けるはずのない盤石な態勢のはずだったが、19

50〜80年代に革新市政が四半世紀以上続き、リベラル志向が強いとされる仙台市民は安倍政権に厳しい目を向けた。「支持者に『あなたのこととは応援するが今回は違う』今の自民は駄目だ」とビラの受け取りを拒まれた。選挙戦中、自民市議らの愚痴は絶えなかった。党幹部の応援も自粛され、街頭に立つことは一度もなかった。

一方、民進は国会で加計学園問題追及の先頭に立つ地元桜井充参院議員をはじめ、仙台入りした枝野幸男前幹事長、山尾志桜里前政調会長らが「お友達政治だ」と政権批判を繰り返した。菅原氏側に誤算だったのは、村井氏との二人三脚ぶりがまさに「お友達政治」と重なり、格好の攻撃材料となったことだ。それでも村井氏は選挙後の記者会見で、自身の応援は「マイナスに働かなかつた」と強弁した。

市役所は共産も含めた「野党市長」に身構え、自民が最大勢力の市議会も対決姿勢がくすぶる。村井氏も4選を目指す10月の知事選戦略に狂いが生じた。代理戦争の余波は、しばらくやみそうにない。

わかばやし・まさと▼1996年入社
福島総局 東京支社編集部を経て 2015年4月から報道部仙台市政担当

被災地通信⑦ 北海道十勝地方

連続台風から1年 地方紙の役割を再認識

小林 祐己 (十勝毎日新聞社)

昨年8月、北海道東部に位置する十勝地方は異常気象に見舞われた。例年ならば台風の直撃を受けることはまれな地域に、7号、11号、9号が立て続けに接近・通過した。そしてだめ押しが、太平洋沖から東北に上陸する史上初のコースを取った10号。上陸した同30日、台風本体は十勝に接近しなかったが、十勝平野西側の日高山脈に局地的に積算500ミリを超える猛烈な雨を降らせた。

3つの台風による雨でばんばんに水を含んだ地面に豪雨が降り、山の保水力は限界に。研究者の調査では、日高山脈では800カ所の土砂崩れ



日高山脈から十勝平野に流れ下った台風災害の土石流跡(清水町/6月/塩原真撮影)

が発生し、9河川で土石流が発生。河川は中・下流部で氾濫し、住宅流失・浸水、道路や鉄道橋の流失、農地流失など広範囲に甚大な被害をもたらした。北海道の調査では、十勝管内の総被害額は893億円、うち農業被害は農作物や農地、施設など約300億円に上っている。

十勝毎日新聞(勝毎)は初めに管内で浸水被害が出た同17日の7号から災害報道態勢を取り、紙面は夕刊1版のため、主に電子版を活用して増水する河川の水位情報などを速報し続けた。本紙では被災・復旧状況や生活情報を伝えるとともに、災害のメカニズムと防災を考える「検証シリーズ」の掲載を続けている。

電子版も駆使して情報発信 被害広く伝える

被災後、寄せられた声で印象的だったのが、災害時に「十勝に被害が出ていることを全然知らなかった」というものだ。10号災害では、台風が上陸した岩手県で20人超の死者・行方不明者が発生し、テレビなどの全国ニュースは被災した高齢者施設などを流し続けていた。十勝では、近隣の川が氾濫していることを知らない人も多かったようだ。

人間としては複雑な思いもした。 国道、河川の復旧いまだ進まず 次への備えもどうする

しかし、日々新しく、大きな出来事に上書きされるのがニュースだ。逆に十勝住民が知らない全国の災害や事件もたくさんあるだろう。そして、東日本大震災ですらそうであるように、人々の記憶は急速に風化する。だからこそ、住民の生活に密着した地方紙の役割は大きい、というのが今回の災害で得た大きな実感だ。被災時には今、身の回りで起きていることを迅速に伝え、災害後は粘り強く地域の防災力向上を呼びかけ続ける。これが住民と同じ目線に立つ地方紙の存在意義だと信じる。

台風災害から間もなく1年。十勝ではいまだに札幌と結ぶ大動脈の国道が通行止めで、氾濫河川の復旧も半ば。再び豪雨が来れば土石流の再来も懸念される。農業は出来秋が期待されるが、昨年の牧草の不作で乳量が低下するという間接的被害も広がっている。十勝がどう被災から立ち直り、次の災害に備えていくのか。地域の一員として、勝毎が伝えていくニュースは山積している。

永田町取材あの時この時 「口止め」の重さ、「内緒話」の難しさ

国分 俊英



こくぶん・としえい

1968年共同通信社入社 社会部
福岡・編集部から72年政治部
政治部長 編集局次長などを経
て 編集局長 常務理事(編集、
国際担当) 共同通信会館代表
取締役専務を歴任 現在 共同
通信社友会会長

1972年から政治部長を終えるまで20年以上、永田町の政治取材に携わった。学生時代は当時の言葉でいうノンポリであった。それが政治、政治家や選挙に興味を持ったのは「大学5年」のときで、政治の取材・報道をやりたいと思いはじめた。

◆愛知揆一選挙事務所でバイト

きっかけは佐藤栄作首相の手で行われた66年の年末解散、翌67年1月の総選挙。貧乏留年生を見かねた知人が「3食・酒付き(わたしは飲みなかつたが)、日当千円。やってみないか」と、愛知揆一氏の選挙のアルバイトを紹介してくれた。

翌日から仙台の大きい古い愛知邸の多分、会合用に使う奥座敷に通った。アンドーさんという酒好きの事務局長の指示通り、選挙カーのル

ート、ミニ演説の場所などを分刻みで記した表を作り、ガリ版で切り版写版で刷る。それを市内の選挙事務所、宮城県庁と仙台市役所の記者クラブに届けるのが主だった。記者クラブや記者の活動も垣間見た。

この選挙は「黒い霧解散」と呼ばれた。愛知氏は宮城1区(中選挙区制)で後援会も盤石、圧倒的に強かった。文部相で佐藤派の幹部だったから他候補の応援で忙しく、選挙区を駆けめぐったのは夫人だった。夫人は酒豪。遊説から帰宅すると「駆け付け3杯」で、日本酒を「ああ、おいしい」と言いながら飲み干す。これが毎日だから驚いた。

愛知氏が一度だけ帰宅した。アンドーさんが「紹介するから」と応接間に連れて行った。あいさつすると愛知氏は「君は俺に入れてくれるか

い」と聞く。黙っていると「いや、いいんだよ。今から自民党に入れることはない。そのうち分かるようになるから」。

東西冷戦下、親米の自民党と親ソ・親中の野党第一党・社会党が2大政党を構成し、対立していた。愛知氏は何を言いたかつたのだろうか。わたしなりの解釈は、学生は理想などを大事にしなさい、しかし、社会に出たら観念的な思考は通用しないことが分かってくるから、という意味だろうと思った。おおようで示唆に富むことを言う政治家もいるものだと感じた。

◆見逃した特ダネのヒント

政治記者になったのはポスト佐藤をめぐる「角福戦争」の最終盤のときで、勝利した田中角栄氏が政権の

座に就いた。わたしは特ダネ記者ではなかつたし、手柄話を書くつもりもない。当時のメモから失敗のケースを再現した方がメディアの現場の人たちに役立つのではないかと思う。駆け出しとして1年半ほど田中首相番を務めた。共同と時事は朝から晩まで動静を追った。これはこれで面白かつた。特にゴルフに行つたときがそうだった。田中氏は多いときは1日2・5ラウンドも回る。

付き合える同伴者はいない。昼、クラブハウスに戻ると「おい、一緒にメシを食おう」とよく声をかけてくれた。田中氏は饒舌だった。政治の際どい話に及ぶと、秘書官が「ここだけの話です。社には上げないでください」と念を押す。

73年5月の日曜日の小金井カントリー倶楽部。昼食の席で「夕方から

結婚式に出る」という話となり、秘書官は「隣席は河野謙三さん（参院議長）です」と言う。この時期、田中氏は衆院に小選挙区制を導入しようとし、野党や世論に反対の声が激しかった。

翌日の朝日新聞を見て驚いた。田中氏が河野氏に小選挙区制断念を伝えたと一面トップである。河野氏は田中氏の理解者だったが、小選挙区制に突き進むことをいさめていた。田中氏と秘書官のやりとりは示唆で「河野さんから話を聞け」という意味だったのだろう。それに気付かずデスクにも報告はしなかった。不明を恥じた。

◆書けなかった「後藤田幹事長」

自民党の平河クラブでは中曽根派を担当した。中曽根派はまだ弱小派閥で、担当記者は他の小さな派閥と兼務していた。三木武夫内閣で中曽根氏が幹事長に就任すると、各社とも独立した担当記者を置くようになった。その第1期である。

中曽根邸への夜回り、朝駆けを続けたが、大抵の記者は次に中曽根派幹部の宇野宗佑氏（後の首相）へ向かうのを常としたが、わたしとNHKの滋野武氏（後に理事）は違った。中曽根氏の腹心として自民党総務会

長を務めていた佐藤孝行氏邸に足を向けた。

佐藤氏はロッキード事件で有罪判決を受けたが、事件は事件として、田中角栄氏と中曽根氏とのパイプ役を水面下で続け、貴重な取材源だった。中曽根政権の誕生に果たした役割は大きい。夜は夜で首相公邸へ密かに入り協議を続け、支えた。政局のプロというべきで、温厚な苦勞人であった。

中曽根政権誕生のいきさつは、周知の通り82年、鈴木善幸首相が退陣表明したことによる。後継をめぐる調整は不調に終わり、総裁予備選となり、結果は田中、鈴木、中曽根の3派により中曽根氏が圧勝する。この過程をわたしは直接フォローしてはいなかったが、応援団的に取材はしていた。

予備選中、佐藤邸を夜回りしたときのこと。中曽根氏勝利の見通しを前提に政府・党の人事の話に及ぶと、佐藤氏は「中曽根さんは官房長官を田中派に頼むよ」と語り「後藤田（正晴）さんだよ。すでに中曽根さんが角さんに話している」と明かす。「角さんは『女房役ぐらい自分の派閥から出したらどうだ』とは言っていたが、後藤田さんになるよ」

当の中曽根派では官房長官は宇野

宗佑氏説が出ていた。わたしは中曽根さんの人事構想の大胆さに驚いた。玄関まで見送りしてくれた佐藤氏は「これはここだけの話。絶対内緒だから社にも上げないでね」と言い、厳守を求めた。

話は自民党担当キャップには口頭で伝えた。こうなると、記事にするタイミングが難しい。予備選の終わりがそろそろ終わった直後、佐藤氏に「後藤田さんの話、もう書いてもいいですかね」と何度か確認した。「うーん、もう少し待ってね」

そんなやりとりをしている最中、読売新聞が一面トップで報じた。佐藤氏は閣僚や自民党の主要人事が固まるまで待つてくれと言う。しかし、この話を知っているのは佐藤氏だけでも限らない。いつ漏れるかも分からない。ストレートニュースではなくとも書けるのではないか。そんなことも考えたが、結局「口止め」の重さを大事にした。

事件の渦中、あるいは逮捕・起訴された政治家への取材は悩ましい。田中金脈問題のとき「俺は全部知っていた」と言った政治記者がいたという。それはうそだと思う。政治取材と疑惑取材は両立しにくいのだ。今でも明かせない、佐藤氏が語ったメモがあることはある。だが、そ

れは積極的にわたしが聞き出したものではない。事件を追った社会部経験者から怒られそうだが、今でも仕事の役割分担と思っっている。

◆1本の電話で救われた特落ち

76年6月の日曜日の夕方、中曽根氏の秘書から自宅に電話がきた。「例の話、記事にするので幹事長の談話が欲しいと数社から申し入れがきているが、国分さんのところも欲しいですよ」。例の話とは、ロッキード事件を批判し河野洋平氏ら6人が自民党を脱党することである。後に新自由クラブを結成する。

河野氏らは中曽根派に籍はあったが、派閥の会合には顔を出さず「政治工学研究所」を結成し、活動していた。脱党の情報に耳にし、幹事長一番の傍ら取材を始めていたところだった。秘書に「幹事長は知っている」と聞いたことがあった。それで電話をくれたのである。

政治部が大車輪で取材し、同僚の矢田美英氏（現東京・中央区長）が全容をつかんだ。脱党は数社の政治記者OBが支援し、一斉に報じる予定だった。1本の電話が特落ちを救ってくれた。取材の甘さが身に染み、人のネットワークの大事さを感じた。

私が会った
あの人

多様性と平和主義を学ばれた 英国留学時代の浩宮さま

八牧 浩行（時事通信出身）

皇太子徳仁親王・浩宮さまの英オックスフォード大学留学時代（1983〜85年）に時事通信ロンドン特派員として、浩宮さまを担当。同大学にたびたび訪ねて取材したほか、英国王室との交流やヨーロッパ王室を訪ねる旅行や登山にも同行した。浩宮さま20代前半、筆者30代半ばの懐かしい日々である。エディンバラ近郊の小高い山、アーサーズシート（アーサーの王座）に登られた際は、登山が得意でない筆者に気遣い、「大丈夫ですか？」と時折歩を止め、見晴らしのいい場所ではポーズまでとってくださいました。そして「（御用邸のある）那須を思い出しますね。母から手紙が来ました」と懐かしそうに語りかけられた。

ヨロップパの中心に位置する小さな王国リヒテンシュタインの皇太子に招かれた際もご一緒した。王宮の近くにはスキー場が広がっており、浩宮さまは皇太子らとスキーを楽しまれた。本社から「スキー滑走姿の写真を撮るよう」指示されたが、広いゲレンデで多くのスキーヤーがいる中、疾走されるので捉えることができない。困り果てていると、「おーい！」と大声がかかり、カメラに向かってゆっくりと滑られた。「イギリス人は親切ですね」と語りかけられたので、「どうして？」と尋ねたら、「店で買い物をした時、あまりお金を使ったことがないので財布からこぼれてしまいました。すると客が拾ってくれました」。留学生活は全てが新鮮のご様子。日本ではちよつとした外出でも、警備やメディアはじめ多くの人たちが同行するが、英国では代表取材の通信社記者も含め総勢5人程度。英国名物パブでは侍従と警察護衛が外で待機するものの、中で楽しそうに地元の人た



オックスフォード大で学友と談笑する浩宮さま（1983年12月／筆者撮影）

ちと談笑していた。オックスフォード大学では世界中の王族やセレブが学んでおり、プリンスでも目立たない。普通にいる20代の若者と変わらず、自由と交友を謳歌されていた。ジーパン姿でデイスコに入ろうとして断られたこともある。柏原芳恵やブルック・シールズのファンで、彼女たちのシールを寮に貼っていた。ある時、英国の大学と日本の大学の違いを質問したら、「こちらの大学のゼミのやりとりは面白い。日本では女子学生はあまり発言しません。こちらでは元気で論破されてしまいます。いいですねえ」と目を輝かした。

の手紙を出したら、行ってくると返事があった」とうれしそうだった。聡明で論破してくれる女性のイメージは雅子さまに引き継がれたのではなからうか。30歳までに結婚したいと明かしたこともあった。理想のお妃像を聞いたところ、「ティファニーであれやこれやと買い物する人では困ります」ときっぱり。

浩宮さまは留学中に世界の多くの若者と交流し、協調と平和友好の精神を学ばれた。オーケストラ合奏、テニスやお酒もたしなみ、パブや寮の食堂で学友と談笑することも多かった。世界各地を旅行し、多くの民族との交流を通じて多様性を尊重すべきであることも認識されたように思う。とても思慮深く、博識で、日本や世界のこととに深い思いをめぐらせていた。現地記者や外交官らと「将来の天皇としてふさわしい」と話し合ったことを思い出す。

（やまき・ひろゆき レコードチャイナ社長、元時事通信常務編集局長）

次号は川村晃司さん（テレビ朝日）にバトンが渡ります。

マイBOOK
マイPR

■隣国への足跡 ソウル在住35年
日本人記者が追った日韓歴史事件簿

黒田 勝弘
(産経新聞社ソウル駐在客員論説委員)

日本は朝鮮半島から離れられない
これは筆者がソウルで長く温めてきた、個人史的日韓史です。日清、日露戦争から韓国併合、苦難の引き揚げ、朝鮮戦争、金嬉老事件、KAL機爆破の金賢姫、日本人拉致……などを、焼け跡の少年時代や広島での駆け出し記者時代のコリア体験を含め、ある種の記者物語として書きました。狙いは、この、悩ましい隣国とどう付き合うかですが、暫定的結論は「引き込まれやすい相手だから深入りには、ご用心」となりました。ご賞味ください。



KADOKAWA 1728円

■なぜメルリ・ストリープはトランプに噛みつき、オリバー・ストーンは期待するのか ハリウッドからアメリカが見える

藤 えりか (朝日新聞社GLOBE編集部)

世界の映画人へのインタビューを通して国際情勢に迫る 芸能人が政治に触れると「炎上」しがちな日本と

違い、米欧の映画界は政治や社会を当然のように語る。影響力が大きいハリウッドは選挙の資金源にもなってきた。ポピュリズムや排外主義の台頭で声を強める彼らにインタビューを重ね、米国そして世界を浮き彫りにしようとする朝日新聞「GLOBE」ウェブ版で始めた連載「シネマニア・リポート」に加筆し書籍化。今や既得権益層と化した彼らの「正論」がいかにトランプ支持層に響かなくなっているかも、著者自身考えさせられている。

凛とした小国
伊藤 千尋 (朝日新聞出身)



幻冬舎新書 907円

グローバルイズムの中で独自の道を行く国 今や米国や欧州は国を閉ざすことに懸命になり、大国が存在感をなくしている。代わって輝いているのが独自の国家哲学を持って自立する小国だ。

国連で核兵器禁止条約を主導した平和憲法国家コスタリカ、国民の粘り強い努力でついに民主化を勝ち取ったミャンマー、超大国に屈服せず独自の道を貫くキューバやウズベキスタンの4カ国を現地から紹介する。

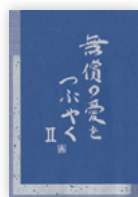


新日本出版社 1728円

■無償の愛をつぶやくⅡ

高尾 義彦 (毎日新聞出身)

ツイッター俳句と雑文と ほぼ毎日、ツイッターでつぶやいた約730句と、同人誌などに掲載したエッセーを1冊にまとめた。3年前に「河彦」の名で第1集を発行。今回は72歳の誕生日と同時に48年間の会社生活(毎日新聞、日本新聞インキ)を終え、縁ある方々へのお礼も兼ねて。題名は拙句「無償の愛と ビールの泡に つぶやいて」から。雑文は「天皇讓位と忌部族」「いま、なぜ田中角栄なのか」「講演録」中坊公平さんの三回「忌」など。



自費出版 1080円

■世界を翻弄し続ける中国の狙いは何か 二〇一四〜二〇一五年

濱本 良一 (読売新聞出身)

隣国・中国で過去2年余、何が起きたかを包括的に分析した 中国社会の先行きを読む上での手掛かりを提供するシリーズ3冊目である。

秋の党大会で総書記再選が確実視される習近平氏がいかに権力を固め、一強体制を築いたのか。ユーラシア大陸を覆う「一帯一路」構想の推進はどうか進められ



ミネルヴァ書房 4860円

たのか。南シナ海での人工島の造成はどう関係するのか。本書を読めば習氏の描く「中国の夢」の実体がおぼろげにせよ浮かび上がるはずである。

■会議報告

●第385回会報委員会

(7・10 小会議室)

8月号と9月号の編集について協議した。

出席 小林委員長、高橋、吉岡、草間、仙石、大寺、小池、河野、長友の各委員。

●第476回企画委員会

(7・12 会見場)

今後のゲスト候補や企画について検討した。

出席 西村委員長、坪井、上田、倉重、鶴原、尾崎、実、山崎(浩)、別府、小川、杉田、川上、山田、木村、友安、山本、瀬口、宮内、島田、竹田、川戸、播摩、平井、福田、ワグナー、安井の各委員。

●第479回会員資格委員会

(7・19 小会議室)

8月1日付の入会を審議し、理事会に答申した。

出席 小松委員長、海保、佐伯、石井、根本、井上、狐野、山本、神田、青木の各委員。

寄贈書

■ルポ 農業新時代(読売新聞経済部著)



農業就業人口や農業所得などの主要指標は総じて右肩下がり。右肩上がりなのは農家の平均年齢と耕作放棄地くらい。日本の農業は大丈夫なのか。これが本書を執筆した動機です。

取材を通じて感じたのは、農業をめぐる問題の根深さです。

農協が売る肥料や農薬はなぜ高いのか。ある県で柑橘類の出荷に使う段ボールはなぜ118種類もあるのか——。不思議なことが次から次へと出てきました。古い制度やしがらみにとらわれず、構造改革を断行できるかどうか。農業新時代を切り開くカギはここにあると思っています。

本書は、図表や用語解説、コラムを随所に盛り込み、農業の入門書となることを心がけました。自民党の小泉進次郎氏のインタビューも採録しています。農業の世界で今、何が起き、課題は何か知りたい、という方におすすめの1冊です。

小川直樹(読売新聞社経済部)

情報発信

クラブ施設では会員による各種の会合が行われています。企業や大使館などの賛助会員も記者発表の場としてクラブを利用しています。

■第5回日韓共同世論調査 記者会見

(主催：言論NPO)

同調査は日韓両国民の相手国に対する理解・認識の状況や、その変化を継続的に把握し、両国民間のさまざまな認識ギャップの解消や相互理解の促進に貢献することを目的に行われている。5回目となる今回は今年6月から7月にかけて、言論NPOと韓国のシンクタンク・東アジア研究院(EAI)が実施。日本は1000人、韓国は1003人から回答を得た。

慰安婦問題をめぐる日韓合意を「評価する」との回答は、日本人が41.8% (前回比6.1ポイント減)、韓国人は21.3% (同6.8ポイント減)。「評価しない」は日本人が25.4% (同4.5ポイント増)、韓国人は55.5% (同17.9ポイント増)だった。

調査結果および分析は言論NPOのウェブサイト(<http://www.genron-npo.net/>)で読むことができる。(7.21 10階ホール)

■読売テクノ・フォーラム 夏休みのシンポジウム

「大地震・大噴火は必ず起こる」をテーマに開催した。「首都直下地震は必ず来る」(平田直・東大地震研究所教授)、「富士山大噴火は迫っているのか」(藤井敏嗣・山梨県富士山科学研究所長)などの講演、「大地変動の時代を乗り切るために」と題したパネルディスカッションが行われ、中高生ら約250人が参加した。(7.22 10階ホール)

新しいOB会員

■ ■ ■ 梅田 光男 1969年日本新聞協会入職。広告部長、事務局長付部長などを務め退職。2004年から日本プレスセンター。専務取締役、顧問を務め2017年退任。



6月に日本プレスセンター顧問を退任したのを機に入会しました。私が日本新聞協会に入った昭和44年。協会の中に、「日本記者クラブ」事務局が誕生したのも何かの縁です。よろしくお願ひします。

■ ■ ■ 岡田 伸之 1978年朝日新聞入社。広報宣伝本部広報部長、財務本部長補佐などを務め、2011年から山口朝日放送。編成局長、報道制作局長などを務め、6月、常務取締役を退任。



「活字」と「電波」の媒体力を信じて情報発信に関わってきました。今後もクラブの事業を通じて国内外の最新動向に接することができればと願っています。

■ ■ ■ 永野 正雄 中国電力取締役を経て2005年からテレビ新広島。副社長、社長、会長を歴任し、現在同社相談役。



約40年前の数年間「エネルギー記者会」のお世話をさせていただいた際、日本記者クラブは身近な存在になり、テレビ局に転籍し一層身近になった。

■ ■ ■ 宮田 一雄 1973年産経新聞入社。ニューヨーク支局長、論説委員、特別記者などを務め2017年退社。



45年におよぶ記者研修を6月末で終え、晴れてフリーランスのジャーナリストになりました。ま、現実は無職とほぼ同義語です。

■ ■ ■ 荒田 成 1978年日本テレビ入社。ロンドン支局長、外報部長、NTVアメリカ社長などを務め2014年退社。現在、白鷗大学特任教授。



物忘れが激しいのに、インプットがない!ということに気がきました。頭も体も心も髪もガス欠はやばいぞ、と思うこのごろです。

セミナー「ジェンダーとメディア」開催

各国の男女格差を指数化した世界経済フォーラムの2016年版「ジェンダー・ギャップ指数」で、日本は144カ国中111位と過去最低水準を記録しました。この現状とメディアとの関係を議論し、積極的な男女平等を促す報道・表現を考えるセミナー(主催・朝日新聞ジャーナリスト学校)が開催されます。ジェンダーのみならず性的少数者(LGBTなど)など人権や多様性の観点からメディアの表現を検証します。「ステレオタイプを超えて」と題したパネルディスカッションも予定されています。

【日時】9月9日(土) 12:00~16:30

【会場】日本記者クラブ10階ホール

【申し込み・問い合わせ】朝日新聞ジャーナリスト学校(03-5541-8629/outreach@asahi.com)

レストラン *価格は全て税込みです

予約電話 和食 3503-2723 洋食 3503-2766・2731
和食 葉月懐石(9/1まで)

先付：黒胡椒帆立真丈、うなぎ蒲焼 お椀：きす葛打ち 造り：三点盛り 焼物：伊佐木若狭焼き 煮物(冷やし)：茄子オランダ煮 揚げ物：牛ヒレステーキ 食事：稲庭うどん 水菓子：季節の果物 グラス冷酒付き(5,400円) (板長：大井由光)

洋食 **おすすめコース(9/2まで)**

夏野菜と蛸の香草風味サラダ仕立て、トウモロコシの冷製クリームスープ、ブラックアンガス牛リブロースステーキ、メロンとバニラアイスクリーム、パン、コーヒー付き(3,672円)。ランチ、ディナー(土曜日はランチのみ9階レストラン)ともにご利用いただけます。(シェフ：黒須修一)

夏の割引サービス 8月末まで

毎年好評をいただいている夏の割引を今年も行っています。ディナータイムの一般メニュー半額サービス(レストラン・アラスカ)、クラブの部屋代割引、宴会プランの用意もあります。アラスカ利用は03-3503-2766、貸室は03-3503-2724まで。

開室時間変更のお知らせ

すでにご案内のとおり、お盆期間(8/14～19)はクラブ施設と事務局の開室時間を午後6時までに短縮します。9階和食レストランはランチタイムのみの営業です。10階レストラン・アラスカは夜も通常通りご利用いただけますが、土曜は休業します。

HP更新情報 <http://www.jnpc.or.jp/>

会見詳録 会見の全文文字記録版

- 2017年度日本記者クラブ賞・特別賞受賞記念講演会
松尾文夫・ジャーナリスト、宮城克文・チューリップテレビ報道制作局政務活動費取材チームデスク、森重昭・歴史研究家(2017.5.30)

取材ノート 私の取材余話

- 村上吉男会員(朝日新聞出身)「情報戦うら・おもて(パート6) サイバー介入、新たな段階に一米大統領選と“ロシア疑惑”」

8月の行事予定(8/3現在)

22Ⓞ	15:00～16:30 10階ホール 著者と語る『戦禍に生きた演劇人たち—演出家・八田元夫と「桜隊」の悲劇』 堀川恵子・ジャーナリスト
31Ⓞ	16:30～17:30 10階ホール 会見 福田康夫・元首相

クラブの電話 ダイヤルイン

- 和食レストラン(9階) …… ☎3503-2723
- 洋食レストラン(10階) …… ☎3503-2766
- 貸室予約、宴会打ち合わせ …… ☎3503-2724
- 受付 …… ☎3503-2721
- 会員事務 …… ☎3503-2727
- 経 理 …… ☎3503-2728
- クラブ行事への申し込み …… ☎3503-2722
- 会見申し込みアドレス …… kaiken@jnpc.or.jp

会員現況

- 法人会員：134社 ●基本会員：746人 ●個人会員：1,261人
- 法人・個人賛助会員：62社・136人 ●特別賛助会員：101人
- 名誉・功労会員：11人 ●学生会員：120人
- 計：196社・2,375人

クラブネクタイ 新柄がお目見え

日本記者クラブのロゴが入った特製ネクタイに新柄が仲間入りしました。紺と白のドットをあしらったデザインで、価格は1本7,204円(税込み)。ラウンジ受付で展示・販売しています。



<理事交代>

- 西日本新聞社
友安潔執行役員東京支社長(旧・行武亨氏)
日本プレスセンター
富田恵専務取締役(旧・西野文章氏)
フジテレビジョン
石原正人報道局長(旧・岸本一朗氏)
中京テレビ放送
大鹿紳東京支社長(旧・小津信一郎氏)

<法人会員代表変更>

- 報知新聞社
丸山伸一代表取締役社長(旧・早川正氏)
日本工業新聞社
上坂徹代表取締役社長(旧・縣良二氏)
西日本新聞社
柴田建哉代表取締役社長(旧・川崎隆生氏)
新聞通信調査会
西澤豊理事長(旧・長谷川和明氏)
日本プレスセンター
富田恵専務取締役(旧・西野文章氏)
フジテレビジョン
宮内正喜代表取締役社長(旧・亀山千広氏)
ビーエスフジ
亀山千広代表取締役社長(旧・宮内正喜氏)
北海道文化放送
加藤雅規代表取締役社長(旧・須賀信昭氏)
静岡放送
榛葉英二常務取締役放送本部長(旧・桂英治氏)
毎日放送
三毛邦央東京支社長(旧・加登英成氏)
日本海テレビジョン放送
真鍋和彦代表取締役社長(旧・藤川昭夫氏)
テレビせとうち
土井雅人代表取締役社長(旧・川端英男氏)
広島ホームテレビ
伊藤裕章代表取締役社長(旧・小平治氏)
テレビ西日本
鈴木克明代表取締役社長(旧・坂田正彦氏)
テレビ朝日映像
村尾尚子代表取締役社長(旧・岡井哲太郎氏)

会報委員会

- 委員長=小林 毅
- 委員=梅原 季哉 大寺 廣幸 勝沼 直子
草間 嘉幸 小池 敏夫 河野 博子
仙石 伸也 高橋 雅哉 長友佐波子
吉岡 政道
- (事務局：長谷川和子 村田 茜)
- ☎03-3503-2752 FAX 03-3503-7271

撮影：^{ほそ}細川 ^{たく}卓 (朝日新聞社映像報道部)



ノーベル平和賞を受賞した人権活動家の劉曉波氏の無条件釈放を求め、キャンドルを手に抗議する女性
= 6月29日 香港

見果てぬ夢

2010年のノーベル平和賞受賞者である劉曉波氏は、授賞式に出席することもかなわず、囚われの身のまま中国瀋陽市の病院で7月13日、肝臓がんのために61歳の生涯を閉じた。

中国政府は、外国での治療や死後に墓を建てることすらも頑なに拒んで、時を置かず海に散骨した。また、欧米諸国からの批判に対しては、内政干渉だとはねつけた。国内での情報統制も徹底していた。

この秋には、5年に一度の共産党大会が開かれる。習近平政権は人事の刷新を図って権力基盤をさらに盤石なものにするともに、国内の締め付けも怠らない。

米新聞社の元北京特派員ジェームズ・マンが書いた米中国交正常化からの過程を記した『米中奔流』と『危険な幻想』を読み返すと、中国では経済成長に伴う個人所得の上昇によって政治の民主化も進むだろうという楽観論がアメリカ側に一時期あったようだが、どうやら完全に誤った見通しだった。

国内総生産(GDP)で第2位の中国は、この先も経済成長を持続させて、やがてはアメリカを抜いて世界中で強い影響力を行使する戦略を立てている。中国のあるシンクタンクは、十数年後には日本の5倍から6倍のGDPになるだろうと試算している。

政治体制は、共産党による一党支配がさらに強まり、民主化の道はますます遠のくと見られている。その先にあるのは、戦略的海軍力を増強してアメリカと覇を競う強大な軍事経済大国なのだろう。

劉曉波氏が希求してやまなかった三権が分立し、自由な権利を行使できる近代的民主国家は、見果てぬ夢で終わるのだろうか。

(江口 義孝)